

人間の心

野瀬 隆平

事の始まりは、ある新聞社が主催するオンラインの講演会を聴いたことだった。

作家の平野啓一郎とイギリスのジリアン・テットという社会人類学に詳しい随筆家の対談である。「AI で世界は読み解けない？」というのが題である。

この対談に興味を抱いた理由は、最近のチャット GPT など、AI の技術がすさまじい勢いで進歩しており、このまま行くと社会のあらゆる面で、予想より早く大きな変革が起こるであろう、と常々考えていたからだ。平野の近著、『本心』が対談で取り上げられることも、この講演会を聴きたいという気持ちを後押しした。

作家と学者の対談は期待にたがわず興味深いもので印象に残った。

早速、図書館で『本心』とジリアンの『Anthoro Vision』を借りて読む。

『本心』は分厚い本であるが、引き込まれるように読み進められた。ジリアンの本は、これからの新しいビジネスを人類学的な視点から考える、というテーマのようであったが、難しく途中でギブアップ。

『本心』は、2040年代の日本を舞台とした物語である。この頃までに日本では、医師の厳密な診察と承認を条件に、自分の死ぬ時機を本人の判断で決められる「自由死」が、認められるようになっている。

主人公の若い男が、母親が生前に自由死を選んだ理由を知りたくて、ヴァーチャルの母親を作ってもらい、その本心を聴き出そうとする。

この仮想の「母」には「心」が無い筈であるが、接する人間の側に心がある限り、「母」にも心があるように感じる。AI が創り出した仮想の世界をどう捉えるべきか、現代社会が抱える諸々の課題をからめながら物語は展開する。

本を読んだ直後に映画化されたので、どの様に映像化されているのか見たくなり映画館に出かけた。

母親の生きている時の本当の姿と、ヴァーチャルの「母」の両方を、女優の田中裕子が演じていた。ヴァーチャルの際に、喜怒哀楽の表情を表わすのか、あるいは表わさないのか、微妙なところをうまく演技していたと思う。